

20世紀におけるオイラド・モンゴルの移住 — 「ガンスン」の事例に関する予備的考察—

チャスチャガン

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

本稿は、新疆ウイグル自治区のホボクサイル・モンゴル自治県に居住する「ガンスン」という集団が、甘肅とホボクサイルを往復してきた移住史を考察し、彼らの集団意識のあり方を検討することを目的とする。

「ガンスン」という名称は、ホボクサイル・モンゴルの他集団と彼らを区別し、移住に関連する歴史記憶が集団的感情を生み出し、強化している。また「ガンスン」同士の相互往来もその集団意識と密接に関係している。この三つの要素が「ガンスン」の集団意識の形成と継続に重要な役割を果たしていることを解明した。

キーワード：モンゴル、オイラド、移住、新疆、ホボクサイル

1. はじめに
2. ホボクサイル・モンゴルについて
3. 「ガンスン」の往復移住
 - 3.1 甘肅への移住
 - 3.2 ホボクサイルへの帰還
4. 「ガンスン」の集団意識
 - 4.1 「ガンスン」という名称
 - 4.2 移住の歴史記憶
 - 4.3 「ガンスン」の往来
5. おわりに

1. はじめに

新疆ウイグル自治区の西北に位置するホボクサイル・モンゴル自治県には、「ガンスン」という人々が生活している。「ガンスン」とはモンゴル語で「甘肅から来た人々」、ないしは「甘肅の人々」という意味であり、「ガンスン」という名称はこの集団の移住の歴史に由来する。つまり、

「ガンスン」は20世紀の初頭に、新疆のホボクサイルから甘肅へ移住し、1958年に甘肅からホボクサイルへ帰還した人々のことを指す。

新疆に居住するモンゴル人にとって、20世紀の初期は非常に不穏且つ複雑な時代であった。政権の交替、国際情勢、階級闘争等によって、新疆の北部に居住する遊牧民であるカザフ人や

モンゴル人の遊牧生活が受けた影響は大きい。この時期の遊牧民の生活に注目した研究は幾つかあげられる。その中で小長谷有紀は、新疆、青海、甘肅、遼寧省、フフホト市周辺、モンゴル国等の地域からきてアラシャン（アラ善、現在の内モンゴル西部に位置する盟）に定住した17人の母たちのライフヒストリーを記述し、当該地域の社会の歴史を反映する重要な資料を提供している（小長谷 2007）。また、1930年代から1950年代にかけて、アルタイ山脈からトルコまで移動したカザフ遊牧民の移動の過程を復元し、近代国家制度の下におかれる遊牧を考察した松原正毅の研究もある（松原 2011）。これらの先行研究で論じられるのはいずれも、故郷を離れて他郷に身を置き、現在に至った人々である。本稿では、彼らがホボクサイルから甘肅へ移住し、また甘肅からホボクサイルへ帰還している点に注目し、ガンスン「帰還集団」と捉える。それによって、移住先での生活及び集団意識を考察するだけでなく、故郷に帰還した人々が新たな集団を形成する過程に注目する。本稿では、最初にガンスンたちに記憶されている、往復移住の歴史を整理し、移住の原因や過程及び移住先での生活について概観する。その上で、現在のホボクサイル・モンゴル社会における帰還集団である「ガンスン」という人々の集団意識に着目し、その形成過程とそれが現在まで維持されている要因、そして彼らの集団意識のありかたを検討する。

このような内地への移住に関する研究は、当時の統治政策、民族政策および国際関係を解明するにあたって不可欠であり、現在の多民族・多宗教的な新疆のあり方を考察する上でも重要な手がかりになる。また、新疆における少数派であるオイラド・モンゴル人の社会に関する情報は断片的であり、歴史文献も少ないため、民間における歴史語りの果たす役割は重要である。そして、その大半は、口頭で伝承される「移住」に関するものだけと言っても過言ではない。そ

れらを記憶する人々は皆、高齢であり、現在それらの語りを収集し、分析しておかなければ歴史を生きてきた老人たちと共にこの世から消え去ってしまう。さらに、新疆という多民族・多宗教な社会におけるオイラド・モンゴル人の「移住」を扱うことは、彼らの民族アイデンティティと歴史認識のあり方に直接関連している。

本稿ではこのような問題意識の下、上記の「ガンスン」と呼ばれる人々の移住経験を通じてホボクサイル・モンゴル社会の集団意識のあり方を考察する。

2. ホボクサイル・モンゴルについて

まずは、ホボクサイル・モンゴルに関する歴史を見てみよう。16世紀中期から末期にかけて、オイラド諸族は内モンゴル諸部とハルハ・モンゴル諸部の攻撃を長期に渡って受けた。その攻撃に抵抗するため、16世紀末期になるとジュンガル、ドルベド、トルグド、ホシユドは「四オイラド」連合を結んだ。だが、17世紀前半（1630年代）に、トルグド部とホシユド部はそれぞれロシアのイジル河畔と青海へ移住することによって、「四オイラド」連合は崩壊した。そこで、故地に残されたオイラド諸部は、ジュンガル部を中心としてジュンガル帝国を建国する。しかし、それと同時代に満洲人の王朝である清朝が登場し、その勢力は中国東北地方からモンゴル、そして長城以南へと拡大していった。17世紀中期から18世紀中期にかけて清朝は東から西へ勢力を拡大し、内モンゴル諸部とハルハ・モンゴル諸部を服属させ、最後にジュンガル帝国を滅亡してオイラド諸部もその支配下に入れる。その過程で、清朝は満洲の八旗に準ずる「盟旗制度」¹⁾を導入し、モンゴル諸部を内属モンゴルと外藩に分けて統治した。

イジル河畔に移住したトルグド部は1770年代に、オバシ・ハーンに率いられて故郷のジュンガルへ帰還する。彼らも他のモンゴルと同じく「盟旗制度」に組織された。

清朝はトルグドをウネンソソクト南路盟（烏納恩蘇珠克圖南路盟）、ウネンソソクト北路盟（烏納恩蘇珠克圖北路盟）、ウネンソソクト東路盟（烏納恩蘇珠克圖東路盟）、ウネンソソクト西路盟（烏納恩蘇珠克圖西路盟）、チンセテゲロト盟（青色特啓勒圖盟）に分けた。1771年清の乾隆帝がトルグドのツェベクドルジ（策伯克多爾濟）を親王に任命し、ブヤント（布延圖）という号を与えた（高・崔編 2007: 41）。彼はウネンソソクト北路盟を率いてホボクサイルに駐屯した。この北路盟の下には3つの旗が設けられ、それぞれザサク左路旗（札薩克左路旗）、ザサク右旗（札薩克右旗）（ゾルガンソムンと呼ばれる）、中旗（オンギンホシューンと呼ばれる）と呼ばれた（高・崔編 2007: 41-42）。

中華人民共和国が成立した後、北路盟のトルグドは新疆ウイグル自治区の管轄に入れられ、ホボクサイル・モンゴル自治県が設置された。現在のホボクサイルに居住するモンゴル人の殆どはその北路盟のトルグドの末裔であり、少数のホシュド、チャハル、ウリヤンハイ、オーロドを含む。

ホボクサイル・モンゴル自治県は新疆ウイグル自治区の西北、タルバガタイ地区の北部北緯45°20′-45°12′、東経84°37′-87°20′に位置する（高・崔編 1999: 40）。地勢は北部の方が高く、最高海拔は3835メートルに達する。一方、南部は低く、最低海拔は249メートルである（高・崔編 1999: 60）。この地域には、山脈、盆地、丘陵地、平原、砂漠等多様の地形・生態が分布している（高・崔編 1999: 61-62）。大陸性北温帯乾燥気候であり、北部の遊牧地帯、中部の工業地帯、南部の農業地帯に分けられる（高・崔編 1999: 62）。

ホボクサイル・モンゴル自治県にはモンゴル族のほか、漢民族、カザフ族、ウイグル族、回族、苗族、彝族、壮族、満族、瑶族、土家族、東郷族、キルギス族、ダヴル族、シベ族、ウズベク族、サラ族、ロシア族、タタール族等、19の民族が共住している（高・崔編 1999: 89-90）。その内

訳は、漢民族が17087人で34.3%を占め、モンゴル族は16870人（33.8%）、カザフ族は13850人（27.8%）、その他の民族は2096人（4.2%）となる（高・崔編 1999: 90）。

新疆ウイグル自治区はウイグル、カザフ等イスラム教を信仰するチュルク系民族が集中しており、チベット仏教徒であるホボクサイル・モンゴルは、特に少数派の中でもさらに少数派といえる。彼らは圧倒的多数であるイスラム社会と漢文化に囲まれるなかで、シャリワン・ゲゲンという転生活仏²⁾を戴き、遊牧を主なる生業として営んでいる。

20世紀の初期にホボクサイルから甘肅へ移住し、20世紀中期に帰還した「ガンスン」という人々は、ホボクサイル・モンゴルと同様にオイラド・モンゴルであり、自らもオイラド・モンゴルの後裔であることを明確に意識している。生活様式や信仰などは、ほぼホボクサイル・モンゴルと同じで、他民族や外地の人からはホボクサイル・モンゴルと同一視されている。しかし、「ガンスン」たちは、外に対してはホボクサイル・モンゴルやトルグド・モンゴルと自称する一方で、ホボクサイルのモンゴルの中では自らが「ガンスン」であるという意識を持つ。

3. 「ガンスン」の往復移住

今日のホボクサイルに居住する「ガンスン」とは、甘肅とホボクサイルの間を移住し、その結果、両地域を往復した人々とその子孫を指す。つまり、彼らのホボクサイルから甘肅へ、また甘肅からホボクサイルへの移住を「往復移住」と定義することができる。その「往復移住」は20世紀初期にホボクサイルから甘肅へ移住した人々が1958年にホボクサイルへ戻ったことを指す。現在「ガンスン」と呼ばれている人々の中には、実体験として、この移住の往路と復路を共に経験した人はなく、帰還の旅を経験した人が何人かいるだけである。彼らのなかで最も年長の人々は80歳代後半から90歳代であり、ホボク

サイルの各地で子孫たちと遊牧生活をしている。筆者は2015年3月に、ホボクサイル・モンゴル自治県の元県長、党書記であるジャウ氏（92歳）を訪ねて、帰還した当時の状況を聞くとともに、健在するガンスンの老人を何人か紹介してもらった。

そのうちの一人はジャラソン氏であり、1933年生まれ85歳と推測される。彼はチャガンコル郷の牧民であり、現在は妻と二人でホボクサイル県城に住みながら、遊牧生活を営む息子たちに代わって県モンゴル学校に通う孫たちの面倒を見る。彼は甘肅で生まれ、25歳の時にホボクサイルへと移住してきた。

この時、移住した集団にはホボクサイル・モンゴル人以外に、ホボクサイル男性と結婚した甘肅の女性も含まれているが、逆に、甘肅の男性と結婚したホボクサイルの女性は甘肅の地に残っている。

ボヤンタイ氏（79歳）は甘肅のホシュド・モンゴル人であり、甘肅で生まれ、現在ホボクサイルのブストング牧場に居住している。ホボクサイル人の男性と結婚して、この地に移住してきた女性の一人である。彼女の夫は若くして亡くなっており、彼女は通常長男のところにいるが、祝日には他の九人の子供たちの家を訪ねまわっている。筆者のインタビューを受けたときは、末娘の家にいた。

以下では、ジャラソン氏を始めとする3人にインタビューした内容をまとめて往復移住の歴史と甘肅での生活を概観する。

3.1 甘肅への移住

(1) 移住の原因

代々ホボクサイルに生活していた人々が甘肅への移住を選択した理由について3人の老人はこう語る。

A：ジャラソン氏

「私の両親の属していた旗の王³⁾ はとても残

酷な人で、牧民をよく殴ったりしていたという。あるとき、この王ともめ事があって、この人に苦しめられるより他の地へ行って遊牧をしようと、幾つかの家族が逃げだして甘肅の領内に入り、マジン山（馬鬃山）という地に生活するようになった。その年は確か1919年だと思う。甘肅に定住してから何年かたって、その王は人を遣わして、彼らに帰ってくるよう説得した、と子供の時は聞いていた。当時移住した人々の戸数と経緯をすべて知っているわけではないが、甘肅に行った人々が全部同じ旗のものだったということではなかった。」

「家畜を追っていく牧民たちは遊牧しながら移動するため、草と水の良いルートを選ぶのは当然である。おそらくアルタイ、バルコル経由で甘肅へ行ったと思う。私の両親は当時結婚したばかりで、まだ子供がいない、二十代の若い夫婦だった。二人は一匹のラクダに荷物を載せて出発したという。不穏であったその時代に長く旅をするのは如何に困難であったかは現在の私たちには想像しがたいが、私の両親が無事にマジン山に着いたのは不思議に思う。」

B：ボヤンタイ氏

「私の夫の父は19歳の時に甘肅へ移住したという。当時は強盗がひどく、家畜等を多く略奪されて生活できなくなって、移住したというより逃げたのでしょ。」

C：ジャウ氏

「移住の理由ははっきりとわからないが、自分の王にがっかりして他郷に行ったと言われていた」

以上の3人の話から、当時の支配者の過酷な統治と強盗による家畜の略奪などが移住の原因となっていたことがわかる。20世紀初期は、中国

国内では何度も政権交代があり、新疆においても新しい政権が成立する途上にあった。そのうえ国際的にも第一次世界大戦とその後の世界秩序の再編の時代で、ロシア、モンゴル等と隣接する新疆が大きく影響されたのはいうまでもない。

当時のホボクサイルには一つの盟が設置され、その下に3つの旗がおかれていた。清朝のモンゴル統治のために用いた「盟旗制度」は遊牧民の牧地を指定し移動を制限し、境を超える遊牧は許可されていなかった。辛亥革命が清朝政権を打倒し、中華民国を成立させ、その支配が新疆にも及ぶ。中華民国統治の初期においては、盟旗制度が存続し、蒙古王公とその権威も維持されていたが、後期には県制度の確立と普及によってその多くが没落した。しかしホボクサイルの親王統治は新中国成立まで維持された（高・崔編 1999: 42）。そのため各王（ザサク）は自らの属民を支配する権利を持ち、彼らの移動に対して指図できるはずだった。しかし、それにもかかわらず、牧民たちが相前後して甘粛へ移住している。このことは、盟旗制度が当時の政府によって保護されていたとしても、20世紀初期のオイラド・モンゴル社会においては既に弱体化しており、属民に対する統制力と保護が低下し、遊牧民の移動がより自由になっていたことを反映しているのかもしれない。

また1916年に、帝政ロシアの徴兵命令に抵抗した一連の暴動の末、大量のカザフ牧民が新疆のイリ、タルバガタイ、アルタイへ逃げ込んできた。その年の末には難民が20万に達し、新疆北部の遊牧地を奪い、当地の牧民と衝突した。新疆政府に居住を許可されなかった者は新疆各地に流浪した（加爾肯・哈力汗 2007: 88-91）。後に新疆政府が30万人の難民をロシアへ送り返しているが、残った者も多く、1927年に中国国籍へ加入する手続きをさせ、新疆の住民としている。ロシア難民の侵入によって家畜や牧地、さらに命を失ったものが多かったことは先行研究で指摘されている（加爾肯・哈力汗 2007: 88-

91）。このことから、遊牧民が主体となる北新疆は相当不安定な状況であったことがうかがえる。

ホボクサイルを離れ異郷へ向かった人々には、それぞれの理由があったと思われるが、その時代の社会的背景が彼らの遊牧生活に大きな影響を与え、移住をしなければならなかったのかもしれない。彼らは当初から甘粛を目的地にしたか否かは不明であり、ホボクサイルと甘粛の間にとどまった人々もいる可能性がある。その時期はアルタイ、イリ、タルバガタイ地区のカザフ人遊牧民もしばしば新疆外の中国各地へ移動していたことがあり、アルタイ地区のモンゴル人が伝染病に罹患した時も、政府が彼らをバルコルへ移住させていたことが伝えられている（娜拉 2008: 48-58）。このような事例を見ると、新疆の西北辺境から中国各地へ移動するルートはある程度知られていたといえよう。

ジャラソン氏の両親は1919年に移住したようだが、『甘粛モンゴル人』（2005）の「肅北モンゴル人大事記」における断片的な情報によると、新疆モンゴル人の移住は、1919年より以前に始まっていた可能性が高い。例えば、同文書には、1902年に20戸新疆トルグド・モンゴルが移住したと記録されている。そのほか、1926年にバヤンゴルのボウーラが率いた20戸あまりのモンゴルと、ホボクサイルのドグルという人物が率いる31戸のモンゴルが移住したことを確認することができる。

1926年に甘粛へ移住したドグルという人は、後に甘粛からホボクサイルへ帰還する際、ホボクサイル政府と交渉を行う甘粛省肅北モンゴル自治県の県長であった。彼はジャラソン氏と親戚関係にあり、現時点ではまだ裏付けが得られていないが、当時甘粛へ移住した者は親戚関係を通じて、移住先の情報やルート等を把握していたのかもしれない。

移住のルートをはっきりと言える人がいないが、アルタイのブルガン・チンゲルを経て、クミルのバルコルから甘粛のマジン山に到着した

と推測する老人たちが多く、明確なルートについて公開されている公文書からは確認できないが、彼らが生活していた地区はマジン山であることは間違いないだろう。

以上からホボクサイルから甘粛への移住は、綿密に計画され、大規模で組織的に行われたものではなく、当時の統治者の支配や強盗の略奪及び人口の流動等の原因によって遊牧ができなくなり、他の牧地を探さなければならないという状況の下で行われた自発的で、小規模で、散発的な移住だったと考えられる。

現在の「ガンスン」は、移住した時期は前後するが、甘粛で同じように生活をして、一緒にホボクサイルに帰還した人々であると言える。

ここまで、「ガンスン」がホボクサイルから甘粛へ移住した原因とその背景を検討してきた。次節においては、移住先の甘粛での生活について概観したい。

(2) 甘粛での生活

甘粛の地で過ごした日々も決して安定したものではなかったと言える。マジン山地区は甘粛、新疆、内モンゴル3つの地区の臨界地であり、またモンゴル国とも境を接しているため、遊牧民の移動は非常に頻繁であった。

A：ジャラソン氏

「私が生まれる前の話であるが、甘粛のマジン山で非常に力を持つラマがいたと言われていた。そのラマをジャー・ラマ、またはハラ・ラマという。彼はハルハからやってきた人で、大きいゲルに住んで、その下で働く人も多かった。私の叔母は娘だったときに彼のところの裁縫人をしたことがあった。ジャー・ラマは残酷な人で、彼女たち裁縫人が一針でも間違ったら、目をくりぬいて追放すると言っていた。あるとき彼女たちが、ラマの服を作っていて、胸の前のところを間違えてしまったので、恐る恐るラマに言った。ところがラマはいつも

のように怒ってもいないし、彼女たちの目をくりぬくこともなく、ただ『この服を修正しなくていいからそのままにしておくように！着るときが来るだろう』と言ったと聞いた」

「その後どのぐらいたったかわからないが、ハルハの政府の軍がジャー・ラマを捕まえに来た。そのとき大きな戦いがあったと言われている。ジャー・ラマは法力を持っていたため、風を吹かせ、雨を降らせ、犬も家畜も大声を出し、3、4日抵抗を続けたという。しかし、そのときラマは例の服を着ていて、丁度胸の前の間違えたところから、銃弾が入って死んだという。彼はやはり法力を持っていたので自分の死などをも予知していたのだろう」

ジャー・ラマとはジュンガルのアムルサナの化身であると名乗り、モンゴル国独立に大きく貢献した人物である（生駒 2004: 15）。生駒によると、彼がモンゴルの西部のホブトで活躍していた時代に行われた改革がモンゴル政府や民衆の支持を失わせ、コサックに侵攻し、ロシアのアストラハンで投獄された。1918年に釈放され、それ以後、多くの危機を乗り越えて、ホブトから320キロ近く離れた、中蒙国境の附近に位置するマジン山に引き籠って、旗を組織し、軍隊を編成し、独立小国家の観を呈したと言われている（生駒 2004: 17-19）。おそらく移住して行った人々はマジン山でジャー・ラマの旗に組織されていたと思われる。ジャラソン氏の語りには、ジャー・ラマを神格化している部分が多くみられる。彼の親世代の人たちはジャー・ラマをアムルサナの化身であると信じていたのかもしれない。

1920年代のモンゴル革命時期には、新しい政権の成立過程において、モンゴル国内にも様々な変動があり、甘粛のマジン山に移住してくる人たちが絶えなかったようである。

マジン山周辺の状態についてジャラソン氏は次のように語っている。

A：ジャラソン氏

「私が子供の時に、マジン山あたりは、様々な衝突が多かった。あるとき私たちは戦争や盗賊から逃げて東へと移住した。ドグルが自警団を組織した。当時、彼は国民党から隊長に任命されていた。遊牧をしながら安定した生活ができずにいた。共産党が来ると聞いて逃げ、軍隊が近くに来ていと聞いて山中に入った。そのときドグルが共産党は人を殺さないと宣伝したので、私たちは共産党に入った。私たちは石包城あたりを遊牧するようになり、ドグルは肅北の政府のリーダーとなった。」

1930年代、1940年代は甘肅のマジン山地区は人の移動が多く、社会秩序が混乱して、盗賊による略奪も多かったことは、地方の公開されている公文書からも知ることができる。1949年に共産党が甘肅に入り、ホボクサイルからのモンゴル人は一つの郷に組織されて、石包城に遊牧地を与えられた（チャガンコ編 2005: 413）。

3.2 ホボクサイルへの帰還

甘肅の地で生活していたホボクサイル・モンゴル人たちは1957年の秋に、甘肅省の許可を得て、故郷へと向かった。彼らが帰還を選んだ理由とその経緯を3人の老人の記憶から掘り起こしてみた。

A：ジャラソン氏

「1957年の秋に甘肅の肅北県から出発した。その前から省政府に移住の申請を出していたが、それが許可されて、ドグル県長が我々を率いてここに帰ってきた。当時私は25歳だった。

1950年代前半に、3人の者が我々の故郷を見てくると言って、ホボクサイルに行ってきた。彼らはその状況を詳しく伝えた。我々は故郷への思いが強かったから戻ることにしたのだ。新疆政府から冬営地をバルコルに手配してもらった。そこからアルタイのボーロル・

トハイとボラガン・チンゲルを経て、一年かけてホボクサイルに到着した。確か44戸で、人口は200人前後であったと思う。荷物は車で先に送った。家畜は20,000頭～30,000頭ほどいて、それを追ってきて、この人民公社に加わった。当時のホボクサイルは貧しかった。今の隣人の家には、その時ラクダが3匹しかいなかった。戻ってきても我々は元の旗には入らなかった。どこでも同じだからと思って。しかしオワー⁴⁾は元のソム⁵⁾と一緒に、毎年祭礼を行っている。戸籍はどこでも同じだけど、オワーはそうはいかない。」

B：ボヤンタイ氏

「私は甘肅の娘であり、実家もヌトク⁶⁾も甘肅にある。ホボクサイルの人と結婚してここに来た。ホボクサイルは、私のヌトクではなく、嫁ぎ先である。私は西寧師範学校を卒業して、19歳で結婚して、20歳でホボクサイルにきた。私の三人の姉と二人の兄も移住してきた。私の嫁ぎ先の家は1,000頭の羊と100頭のラクダを追ってきた。

甘肅から出発する際、ホボクサイルから、ババル・ダワー等3人が迎えに来て道案内をした。ホボクサイルに着いたときは既に秋になっていた。バルコル、イケ・ボラガン、バガ・ボラガン、ボーロル・トハイというルートで来た。アルタイでカザフの盗賊に会ったが、無事だった。しかし、ホボクサイルに近づくと、共産党の軍が不審者扱いして、銃を撃ってきた。人は撃たれなかったが、家畜がバラバラになった。河を渡るときだったから、羊が多く流されてしまった。ラクダも、馬もバラバラに走り、女たちは子供を抱きかかえながら家畜を集めようとした。軍は遠くからたくさんの人や家畜が来るのを見て、確認できなかったのだと思う。家畜を集めて近づいてから、ドグル県長が赤い布を出して振ったら、相手は射撃するのを止めた。次の日にジャウ書記

等3人か4人が迎えに来てくれた。

私たちはホボクサイルに入ってから数日後、異なる公社⁷⁾に入った。当時の戸数は47戸ぐらいだったと思う。」

C：ジャウ氏

「1958年に甘肅肅北モンゴル自治県の県長であったドグルが来て、『甘肅へ移住したモンゴルは故郷へ帰還する願望を強く持っている。ホボクサイルのほうはそれを許可し、我々を歓迎してくれるかどうかを聞くために、代表としてやってきた』といった。当時私はホボクサイル県長であった。我々としては大歓迎であった。移住してから何十年たっても、彼らにとってのヌトクはホボクサイルであり、ヌトクへ戻るのは当たり前であると思ったからである。

その後、ホボクサイル県から地区、自治区へ報告をだして許可を得た。彼らを迎えに自治区から1人、ホボクサイルからは1人か2人、とにかく3人ぐらいが行った。

彼らがホボクサイルに移住してきたときは私が4、5人を連れてウレンゲ湖まで行って迎えた。戸数は45戸ぐらいであり、家畜もかなり多く持っていた。彼らの意思を尊重してソムに分けた。」

甘肅からホボクサイルへの帰還は、故郷への思いが強かったからと言われているが、1950年代には移住民である青海モンゴル人が青海へ帰還したことや、河北人が甘肅に戸籍を入れたことなど、甘肅に居住していた移住民が故郷へ戻るか、現地の戸籍に入る現象がみられる。甘肅省肅北モンゴル自治県において県内に生活する移住民を調整する必要があったことも、ホボクサイルへの帰還のもう一つの背景であると思われる。

甘肅省肅北モンゴル自治県の県誌、『肅北モンゴル人』における「肅北モンゴル人大事記」には、

「1957年の9月に、肅北県に居住していたトルグド部落牧民計39戸、189人が家畜10380頭を持って、ホボクサイルへ帰還した」と記録されている。

この記述はインタビューをした3人の記憶とは多少異なるところがある。移住の時期について、1957年の秋に出発して1958年の秋にホボクサイルに着いた点は、ほぼ間違いないと思われる。しかし、肅北の県長ドグルがホボクサイル政府の許可を得るため到着した時期は1958年ではなく、1957年9月以前であり、ジャラソン氏のいう「1950年代前半に故郷を見てくると3人がホボクサイルへ来て戻った」人たちであるかもしれない。

また帰還した戸数について『肅北モンゴル人』の記録と、インタビューで得た44-47戸であったという情報も多少異なるが、途中1年の時間かかっているから、新しい世帯が生まれる可能性もある。個人の記憶の差異もあり、または現在のガンスンたちの状況に基づいた推測であるかもしれない。

家畜の頭数については『肅北モンゴル人』の記載とは異なるが、「多かった」というのは事実であったようである。ジャラソン氏とボヤンタイ氏もインタビュー中、家畜の数が多かったことを非常に強調していた。

ガンスンたちの何十年にもわたる往復移住に関する文字記録は、『肅北モンゴル』における短い記録しか存在しないと言ってもいい。以上、主にホボクサイルに居住する2人のガンスン老人と一人の元ホボクサイル県長の語りに基づき、『肅北モンゴル人』の内容と比較しながら、ガンスンの往復移住の過程を解明することを試みた。

甘肅から帰還して、60年近く経過したこの人たちは、ホボクサイル・モンゴル人のなかでは「ガンスン」と呼ばれ、自らも「ガンスン」と意識するようになっている。次章では、現在の「ガンスン」という集団意識の形成とその継続について考察し、そのありかたを解明する。

4. 「ガンスン」の集団意識

20世紀の初期に、新疆のホボクサイルから甘肅のマジン山へ移住し、1958年にホボクサイルへ帰還した人々が現在のホボクサイル・モンゴル社会において「ガンスン」という集団として認識されている。本章では、ホボクサイル・モンゴル社会における「ガンスン」に着目し、前章に取り上げた3人の語りに基づき、彼らの「ガンスン」という集団意識のあり方を解明していく。

上に述べたようにガンスンたちはホボクサイル・モンゴルと同じく、ロシアのイジル河畔から帰還したトルグド族であり、彼らもその意識を強く持っている。しかし、中でも甘肅とホボクサイルを往復した移住という出来事が、彼らに周囲と異なる歴史観を与え、その歴史に関する記憶が彼らを強く結びつけている。移住の歴史記憶を繋ぎとめているのはまさに「ガンスン」という名称である。周囲のモンゴルから「ガンスン」と呼ばれ、自らの家系や系譜を述べる際も「ガンスン」「ガンソから来た」と強調する。さらに、「ガンスン」という名称を用いるこの人々は、互いに頻繁に訪問し合っ、「ガンスン」の歴史を確かめ、その下で固い絆を築き、「ガンスン」という集団意識を形成し、継続させている。

本章では、「ガンスン」という集団意識の形成と継続を支える3つの要素を分析することによって、彼らの集団意識のあり方を解明する。

4.1 「ガンスン」という名称

モンゴル人の間では自らの出自をはっきり知ることが常識であり、人と人が知り合いになる時には、その出自から確認しあうことが多く、通常「上は7代まで知るべき」であるとも言われる。ホボクサイルでも数多くの一族や親族集団があるが、彼らが知り合いや近隣の人々の出自を把握していることは珍しいことではない。面識のない人同士が初めて会うときも自らの出自を語るのは決まりである。ホボクサイルにはトルグド以外に、チャハル、ウリャンハイ、オー

ロド、ホシュドなども少数ながらいる。トルグドは多数であるため、他の集団からはわざわざ「この人はトルグドだ」とは言われないが、これらの少数派の人たちはトルグドに「あの人はチャハル」「ウリャンハイのだれだれ」とよく言われている。

「ガンスン」という名称がいつどのように始まり、どのように定着したかは明確でない。おそらく甘肅から移住して来た当初、各地に遊牧地を与えられて住みながら、自分たちを紹介する際に、移住の歴史を語り、周囲の人たちからは「甘肅から移住してきた人たち」、モンゴル語（オイラドモンゴル語）では「ガンソ ガース イレッセン ストク⁸⁾」と呼ばれたため、「ガンスン」という呼称が生まれたのではないかと推測される。このことを、ホボクサイルの何人かの老人に尋ねてみたところ「甘肅から来たのでガンスンと呼んだのだろう」と答えている。こうした経緯を持つ「ガンスン」という言葉が、現在、自らを表す呼称ともなっている。

「ガンスン」と呼ばれている人たちは本来、ホボクサイル・モンゴルであり、独立した集団ではなかった。しかし現在ホボクサイルでは「ガンスン」という名称が独立した集団、つまりトルグド、チャハル、ウリャンハイ、ホシュド等と同様に使われている。

「ガンスン」が特定の、固定された名称となったのは、ホボクサイルに居住していたモンゴル人たちが日常生活のなかで新しく移住してきた彼らを、区別して説明する必要があったからであろう。一方、甘肅から移住してきた人たちは、自分たちだけが持つ往復移住の歴史を「ガンスン」という名称で表現し、ホボクサイルにおいて自らを位置づけたかったかのかもしれない。

ガンスンたちは、同じ歴史を共有しているといっても、全員が同じ場所で生活しているわけではない。しかし、各地に分散して遊牧している彼らは「ガンスン」という名前のもとで互いを確認し合っている。

「ガンスン」という名称が、彼らをホボクサイ
ル・モンゴルの他の集団と区別し、この名前こ
そが「ガンスン」の集団意識の形成と継続に重
要な役割を果たしてきた。

4.2 移住の歴史記憶

前述したように、移住の歴史が彼らに「ガン
スン」という名称を与え、その名称が、彼等の
移住の歴史を表現している。「ガンスン」という
名前が「甘肅の人」「甘肅から来た人」を意味す
るため、この名称を使用するたびに、甘肅とホ
ボクサイルとの間を往復したという歴史とガン
スンたちとを常に結びつけている。

実際のところは、現在、甘肅とホボクサイ
ルの間の往復の全過程をすべて経験した人はす
でにおらず、復路の移住を経験した人が何人か健
在なだけである。これらの老人たちは、自分で
経験したことや上の世代から聞いたことを、口
頭で次代へ伝承している。つまり、「ガンスン」
の歴史が代々口頭で伝承されることによって、こ
の歴史観はガンスンたちの間で共有されている。

口頭で伝承される歴史は、移住の過程におけ
る経験、甘肅で生活していた間に転々と移動し
ていたこと、略奪にあったこと、自らの命や家
畜を守るために戦ったこと、ホボクサイルへ帰
還する際に甘肅に残った身内や甘肅から持って
きた家畜のことなど、様々な内容のものである。
これらの語りの多くは、苦しいことや悲しいこ
とであり、そのような過去のことを想起して語
ることが、ガンスンたちの集団感情を強めてい
ると思われる。

一方、ホボクサイルに居住するガンスン以外
のモンゴル人たちも、「ガンスン」の名前をその
歴史とともに解釈し、それを口頭で伝承するこ
とで自らと区別している。「ガンスン」の歴史が
当該集団だけに記憶され、伝承されて共有され
るだけではなく、それ以外のモンゴル人たちの
間においても伝承され、共有されている。それ
によって「ガンスン」は、ホボクサイル・モン

ゴルの中でも特別な存在となっている。

要するに、移住と関連する歴史記憶が「ガン
スン」たちの集団的感情を生み出し、強化して
いる。そしてそれが「ガンスン」の集団意識を
支えている。さらに、その歴史と記憶をガンス
ン以外のホボクサイル・モンゴルとも共有する
ことによって、「ガンスン」がホボクサイル・モ
ンゴル社会において1つの集団として成り立って
いるともいえる。

4.3 「ガンスン」の往来

ホボクサイルに居住するガンスンたちは、帰
還してから60年近く経つ今でも頻繁にお互いを
訪問し合い、親密な関係を保っている。彼らは
旧正月、結婚式、葬式等には相互訪問し、自ら
の移住の歴史を語り合い、甘肅の地に残った家
族のことを思い出すなどして、ガンスンの歴史
記憶を共有している。

さらに、現在、ホボクサイルにいるガンスン
たちの間の相互訪問だけではなく、甘肅に残っ
た親戚への訪問も頻繁になってきている。

A: ジャラソン氏

「甘肅の肅北にいる親戚がナサン・バヤル⁹⁾
をしていた時に、ここ（ホボクサイル）から
何人かの人が訪問しに行った。彼らは、何十
年も離れ離れになっていた親戚と会えて、非
常に喜んだという。丁度ここから行った人た
ちがプレゼントを渡していたときにナサン・
バヤルをしていた人がなくなった。年をとっ
た人で、遠くから来た親戚を見て嬉しくて、
興奮しすぎたのかもしれない。」

B: ボヤンタイ氏

「私の実家は甘肅であるため、家族はみな向
こうにいる。私の兄弟と親戚は甘肅の酒泉、
内モンゴルのアラシャン・エジナ、青海にも
いる。私の母も、兄とともに青海のデレハイ
市にいた。去年、私たち21人が青海へ行って

きた。非常に感動して、泣いて笑った。会えてよかった。私の90歳の姉がいて、彼女は私たちの歴史をはっきりと知っていて、私が小さくて覚えてなかったことも全部教えてくれた。

私たちの往き来はつい最近始まった。1993年ぐらいに私たちが親戚を探しはじめて、甘肅と青海へ行き、それから往き来が始まった。もう亡くなった2人の姉が何回もホボクサイルに来てくれた。おとしも青海のデレハイにいる姉が子供たちと来た。ここにいる親戚は、来年も甘肅と青海へ行く予定である。」

ホボクサイルに移住してきた当時は、丁度中国の大躍進（1958～1961）と文化大革命（1966～1976）が行われ、経済的にも、精神的にも甘肅に残った家族や親戚を訪問する余裕がなかったと思われる。ボヤンタイ氏の家族も裕福な牧民として批判されていたと証言している。甘肅から帰還する際に、彼らが持ってきた家畜が多かったことをジャラソン氏も述べており、帰還したガンスン40余りの世帯は、概して多くの家畜を持っていたために、文化大革命期において批判される原因となったと思われる。そして1990年代に入り、生活が安定し始めたため親戚を探しに行き、訪問し始めたようだ。ホボクサイルに居住するガンスンたちの日常における相互訪問と、甘肅に残った親戚への訪問は、互いに親密な関係を保ち、集団的感情を強化する行動であると思われる。

本章においては、「ガンスン」という名称の由来を確認し、ホボクサイル・モンゴル社会における「ガンスン」の集団意識の形成と継続に際して機能している要素を検討した。「ガンスン」という名称と移住の歴史意識、互いの相互訪問がこの集団の集団意識を支えていることがわかった。つまりこの集団のアイデンティティの根幹となっているのは移住の歴史であることが明らかになった。これらのこと以上に「ガンスン」という集団の政治的、文化的活動は見受け

られないが、おそらく、近年の漢族によるホボクサイルへの大量移住などによって、モンゴル各集団の出自意識が高まってきたことは、「ガンスン」の集団意識の強化につながっていると考えられる。

4. おわりに

本稿では、新疆ウイグル自治区のホボクサイル・モンゴル自治県で暮らす「ガンスン」という集団のホボクサイルと甘肅を往復した移住を考察し、現在のホボクサイル・モンゴル社会における「ガンスン」の集団意識のありかたを検討した。

「ガンスン」の往復移住とは、20世紀の初期に新疆のホボクサイルから甘肅のマジン山へモンゴル遊牧民が自発的に、小さな規模で、無組織的に移住をし、1958年に故郷へ帰還してきたことを指す。帰還した後、これらの人々はホボクサイル・モンゴル社会において一つの集団となったが、新たに「ガンスン」という集団が形成されることになった。彼らの集団意識は「ガンスン」という名称、移住の歴史記憶、日常の相互訪問という3つの要素によって支えられている。

本論は短期間に行った調査の予備的報告であり、「ガンスン」の移住の歴史と集団意識の分析において、対象はホボクサイルだけにとどまり、甘肅や青海、内モンゴル等に残った人々に対する検討は欠けている。今後の課題としては、調査対象を広げるとともに、「ガンスン」の文化的あるいは組織的な紐帯を詳しく考察し、この帰還集団の存続に焦点を当て、移住と集団意識の形成との関連性を考察し、分析を進める次第である。それを通して、地域や民族集団に限定されない、移住と集団意識の形成に関する普遍的な議論への貢献を目指したい。

注

- 1) 17世紀から20世紀に至る満洲清朝のモンゴル統治制度は、一般に盟旗制度と呼ばれる。

- 2) チベット仏教の高僧
- 3) ザサク旗の旗長、旗民の領主であり、清朝朝廷の官吏である。
- 4) モンゴル語のオボー、オイラド・モンゴル方言では「オワー」となる。オワーは、モンゴル人が昔から天神、地神、山川の神々を祭礼する場であり、祭礼することによって病気や災害から身を護り、安定や幸福、富裕をもたらすとみなされている。
- 5) 旗の下に置かれる行政単位。
- 6) 一般に故郷を意味する。
- 7) 人民公社、当時のホボクサイルには四つの公社が設立された。
- 8) 人間集団をさすときもある。本稿で言うヌトクとは、オイラド方言の「人々」という意味である。
- 9) 自分の干支の年の旧正月に祝う行事。通常数え年61歳、73歳、85歳、97歳の時に行われる。

参考文献

日本語文献

- 生駒正則
2004 『モンゴル民族の近現代史』 東洋書店。
- オーエン・ラティモア、エリノア・ラティモア
1950 『中国一民族と土地と歴史』 小川修伝、岩波新書。
- 小沼孝博
2014 『清と中央アジア草原—遊牧民の世界から帝国の辺境へ』 東京大学出版会。
- 日野 強
1909 『伊犁紀行』（上下巻）博文館。
- エリノア・ラチモア
1942 『新疆紀行』 神近市子訳、生活社。
- 小長谷有紀・サランゲレル・児玉香菜子編
2007 『オーラルヒストリー：エジネーに生きる母たちの生涯』 オアシスプロジェクト。
- 小長谷有紀・斯琴編
2013 『モンゴル口頭伝承の一資料』 国立民族学博物館報告114。
- 西田 保
1942 『左宗棠と新疆問題』 博文館。
- 片岡一忠
1991 『清朝新疆統治研究』 雄山閣出版。
- 佐口 透
1986 『新疆民族史研究』 吉川弘文館。

カラミシエフ

- 1943 『蒙古と西支那』 緒方一夫訳、大鵬社。
- 松原正毅
2011 『カザフ遊牧民の移動—アルタイ山脈からトルコへ1934-1953年』 平凡社。

中国語文献

- 新疆維吾爾自治区檔案局 中国社会科学院辺疆史地研究中心 『新疆通史』 編纂委員会編
2007 『近代新疆蒙古歴史档案』 新疆人民出版社。
- 博爾塔拉蒙古自治州地方誌編纂委員会編
1999 『博爾塔拉蒙古自治州誌』 新疆人民出版社。
- 和布克賽爾蒙古自治県地方誌編纂委員会、高魁武・崔銳鋒主編
1999 『和布克賽爾蒙古自治県誌』 新疆人民出版社。
- 新疆社会科学院民族研究所編
1980 『新疆簡史』（1、2冊） 新疆人民出版社。
- 謝彬
1923 『新疆遊記』 中華書局。
- 李国棟
2007 『民国時期的民族問題与民国政府的民族政策研究』 民族出版社。
- 朱培民
2000 『20世紀新疆史研究』 新疆人民出版社。
- チャガンコ主編
2005 『肅北蒙古人』 民族出版社。
- 高魁武・崔銳鋒編
2007 『ホボクサイル・モンゴル自治県誌』 バ・ソプト、ゴ・バトジルガル、ジャ・ドルジ訳、新疆人民出版社。
- 加爾肯・哈力汗
2007 「試論民国時期俄属中亜難民遷入新疆事件」『貴州師範大学学報』（社会科学版）（2007-5）88-91。
- 李元斌
2008 「民国時期新疆蒙古族盟旗制度的變遷」『西部蒙古論壇』（2008-4）15-20。
- 劉国俊
2014 「民国時期新疆盟旗制度的廢除」『新疆地方誌』（2014-1）48-54。
- 馬国榮
1994 「論新疆建省」『烏魯木齐職業大学学報』（1994-3、4 総第9、10）127-131。

娜拉
 2008 「民国新疆地方政府对遊牧民族的統治政策」『中国边境史地研究』(2008-3 第18卷第一期) 48-58。

蘇奎俊
 2013 「新疆建省与察哈爾營的改制」『西部蒙古論壇』(2013-1) 24-30。

田自耕・孟楠
 2008 「新疆建省後蒙古族社会經濟变化」『西部蒙古論壇』(2008-3) 41-47。

吳福環
 1995 「我国边疆治理制度近代化的重要举措—論新疆建省」『新疆大学学报』(哲学社会科学版)(1995-第23卷-第4期) 38-。

Migration of Oirat Mongolia in the 20th century:

A preliminary study on the case of “Gansun”

Chasuchagan

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies),

School of Cultural and Social Studies,

Department of Regional Studies

This paper, examines the identity and consciousness of a group of people known as “Gansun.” They now resid in the Hoboksair-Mongolian autonomous county of Xinjiang, China This clan had migrated to Gansu Province at the beginning of the twentieth century, but many had later returned to Hoboksair The name “Gansun” differentiates themd from the Hoboksair-Mongolian (Oirat Mongolian) group. The members of this “Gansun” group share the memories of the past migrations, and this creates a sense of togetherness. Recently they often visit Gansu Province to see their relatives, and such visits play a vital role in strengthening the group, consciousness of the “Gansun.” The paper elucidates how these three factors, the name “Gansun,” memories of the migration, and the visiting of relatives, have helped from and reinforce the group identity.

Key words: Mongolia, Oirat, migration, Xinjiang, Hoboksair